

気軽に立ち寄れる農園を目指して

大河原町では「りんご屋さん」の愛称で親しまれ、曾祖父の代から続く町内でたった一戸のりんご農家を斎藤越也さん（32歳）が継いだ。

3年前から高齢の父に代わって、80aのりんご畑を管理し始めた。

今は品種を増やし、りんごチップスの加工や販路拡大に取り組み、順調に収益を伸ばしている。苦勞よりも楽しさを感じたという。

昨年、町の青年等就農計画が認められ、認定新規就農者として本格的に農業経営に乗り出した。



斎藤さんは「今は出荷販売が主だが、将来はお客さんが訪れる直売農園にして、早期収穫品種、人気品種の増殖に取り組み、長い期間、訪れる度に違った味を楽しめるようにしたい」と話す。

周辺にはミニ動物園や散策も楽しめる日帰り入浴施設もあり、農産物の産直販売も行っている。ここは、稲作中心の町

でありながらわずかな果樹農家が集まっている地域だ。

今後は「周辺の施設や苺農家、ブルーベリー農家とも連携し、地元の人が日常的に立ち寄り、採りたての旬の果物や野菜を美味しく楽しめるようにしたい」と地域への思いを熱く語った。